

日本の詩歌

30

俳句集

中央公論社

日本の詩歌 30

©1970

俳句集

昭和45年1月15日初版発行

昭和45年6月1日再版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三見印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵写真印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

夏目漱石	9
村上鬼城	17
松瀬青々	25
石井露月	33
喜谷六花	38
松根東洋城	43
臼田亜浪	51
小沢碧童	59
渡辺水巴	67

山口青邨	芥川龍之介	杉田久女	久保田万太郎	中塚一碧楼	竹下しづの女	原 石 鼎	尾崎放哉	富安風生	前田普羅	種田山頭火
163	158	150	142	129	124	111	106	93	85	80

高野素十
滝井孝作
栗林一石路
西島麦南
富田木歩
川端茅舎
橋本多佳子
阿波野青畝
中村汀女
西東三鬼
金尾梅の門

262 454 246 233 225 212 207 199 194 189 176

日野草城
秋元不死男
富沢赤黄男
芝不器男
星野立子
大野林火
加藤楸邨
平畑静塔
松本たかし
篠原鳳作
長谷川素逝

353 348 335 327 314 306 298 293 288 280 267

細見綾子

358

安住敦

363

藤後左右

368

篠原梵

373

石田波郷

378

解説

山本健吉

鑑賞

安住敦

大野林火

沢木欣一

阿部喜三男

飯田龍太

近代俳句史年表

島崎千秋
平畑静塔

俳
句
集

夏目漱石

夜三更僧去つて梅の月夜かな
 鵜飼名を勘作と申し哀れ也
 名月や故郷遠き影法師
 去ん候是は名もなき菊作り
 時鳥弓杖ついて源三位
 罌粟の花左様に散るは慮外なり
 何となく寒いと我は思ふのみ

三冬氷雪の時什麼と問はれて

夏目漱石（慶3・1・5と大5・12・9）本名金之助。江戸牛込に生る。東京帝大英文科卒。松山中学校在職中、子規の影響をうけて俳句を始め、独自の句境を開いた。その後、小説家としての名声あがるに及んで、俳人としての活動はやめたが、ときに消長はあつても終生俳句を作った。ことに明治四十二年修善寺大患以後の俳句は、その後の小説と共に新境地を示した。没後刊行の『漱石俳句集』、『夏目漱石全集』俳句篇等がある。

「鵜飼名を」の句。明治二十八年作。漱石の句は古く明治二十二年の作から記録されているが、その多くは手なぐさみという程度にすぎない。漱石の俳句開眼は明治二十八年松山中学赴任以後といつていい。以下その当時の句。すでに漱石独自の世界を開いている。

乾^{から}鮭^{さけ}と並ぶや壁の棕^{しゆ}櫨^ろ箒^{ばうき}
 雪の日や火^こ燵^ちをすべる土佐日記
 炉開きや仏間に隣る四疊半
 尼寺や彼岸桜は散りやすき
 叩^{たた}かれて昼の蚊を吐く木魚哉^{かな}
 白露や芙^ふ蓉^{ろう}したゝる音すなり
 鳥飛んで夕日に動く冬木かな
 若草や水の滴^{した}たる蛸^{しじみ}籠^{かご}
 窓低し菜の花明り夕曇り
 短夜の芭蕉は伸びてしまひけり
 紅白の蓮^{すり}搦^ぼ鉢^ぼに開きけり

「雪の日や」の句。明治二十八年作。この前後の句はいずれも正岡子規に送られ、その添削^{てんせう}を乞うたものである。それらの句稿はおびただしい数に上っている。子規は漱石の松山赴任の年、従軍記者として戦地に赴いたが、帰途船中で略血^{りやくけつ}して神戸病院に入院していた。やがて子規は松山に帰り、しばらく漱石の下宿に同居していたが、その年秋には上京。子規の松山滞在中、否^{いな}応^{おう}なしにその俳句仲間に引き入れられた漱石は、子規の上京後、憑^{たの}かれたように俳句を作っては子規の許に送った。このことは翌二十九年四月、熊本第五高等学校に転任してのちも変わらず、子規の死に至るまで続いた。

「古白とは」の句。明治二十九年作。古白は藤野古白。子規の従弟。子規と共に俳句に志したが、明治

二十八年四月、ピストル自殺。

作。子規は「明治二十八年の俳句
「今年より」の句。明治二十九年

界」で初めて漱石の句を論じ「始めて作る時よりすでに意匠において句法において特色をあらわして

り」と言っている。その取材は千
変万化、その表現は自由暢達、と

きに「茶風に、ときに蕉村風に、
しかしその根底には漱石の知性が

働いている。以下七句は恋を主題

意匠に、後年の小説家漱石の芽ばえが察しられなくはない。

えが察しられなくはない。

「六波羅へ」の句。明治二十九年作。この句のように題材を歴史に

つたところ。子規に啓発されて句を始め、子規の添削を受けてはい

だが、漱石は子規の写生二筋の道はすすまなかった。

寒山^{かんざん}か拾得^{じつとく}か蜂^{はち}に螫^さされしは

ふるひ寄せて白魚^{しらぎ}崩れん許^{ばか}りなり

落ちさまに蟲^{あぶ}を伏せたる椿哉

古往^{こわう}今来^{こんらい}切つて血の出ぬ海鼠^{なまこ}かな

西函嶺^{かんれい}を躑^こえて海鼠^{なまこ}に眼鼻^{がんび}なし

土筆^{つくし}物言はずすん／＼とのびたり

堇程^{すみほど}な小さき人に生れたし

濃^{こまや}かに弥生^{やよひ}の雲の流れけり

仏性^{ぶつじやう}は白き桔梗^{ききやう}にこそあらめ

月に行く漱石妻を忘れたり

某^{それがし}は案山^{あか}子^しにて候雀^きどの

帰源院即事

妻を遺して独り肥後^{ひご}に下る

「堇程な」の句。明治三十年作。熊本に在って漱石は地方俳壇を指導したが、すでに漱石の俳名は、子規に続き、碧梧桐・虚子と共に高かった。この年前後は漱石が最も俳句に身を入れた時代で、その句境も深まっていた。「人に死し」の句などと共に、この時代の漱石の代表句と言っている。

「仏性は」の句。明治三十年作。同じく代表句の一つ。この年七月、漱石は妻を伴って上京したが、帯京中妻は流産し、鎌倉に転地療養した。これはその妻を見舞って鎌倉に赴いた時の作か。帰源院は円覚寺の塔頭、漱石が若いころ、釈宗演のもとで参禅した所である。現在、円覚寺境内にこの句の句碑が建っている。

鳴き立てゝつくく法師死ぬる日ぞ

浜に住んで朝顔あさぎ小き恨みかな

行く年や猫うづくまる膝ひざの上

秋の川真白な石を拾ひけり
内牧温泉 二句

秋雨や杉の枯葉をくべる音

韋編ゐへん断えて夜寒の倉に束ねたる
図書館

朝寒あささむと申し襦袢じゆばんの贈物
習学寮

朝寒の顔を揃へし机かな
教室

暗室や心得たりときりぎりす
物理室

化学とは花火を造る術ならん
化学室

剥製はいせいの鵒もず鳴かなくに昼淋し
動物室

「鳴き立てゝ」の句。明治三十年ころの作。その後も漱石の俳句は多産を続け、そのつど、子規の許に送られたが、この句も次の「浜に住んで」の句も子規宛句稿の中には洩れている。この年九月、漱石は療養中の妻をおいて熊本に帰り「月に行く」の句、市外大江村に転居した。そこでの作か。

「韋編断えて」の句。以下六句、漱石が教授をしていた熊本の五高を題材として作ったもの、明治三十二年作。この句のはか一連は「学校」「運動場」に始まり、「食堂」「演説会」「撃剣会」「柔道試合」に終る二十九句で成っている。その五高には寺田寅彦（寅日子）が学生としており、漱石の家で開かれる運座に出席していた。因みに松根東洋城は漱石の松山中学時代の生徒である。

筒袖^{つつそで}や秋の柩^{ひつぎ}にしたがはず

倫敦にて子規の計を聞きて
五句

手向^{たむ}くべき線香もなくて暮の秋

霧黄なる市に動くや影法師

きりぐすの昔を忍び帰るべし

招かざる薄^{すすき}に帰り来る人ぞ

時鳥^{ほととぎす} 厠^{かはや}半ばに出かねたり

障る事ありて或人の招飲を
辞したる手紙のはしに

春の水岩を抱いて流れけり

(前書略)

花落ちて碎^{くだ}けし影と流れけり

(前書略)

独居^{ひとり}や思ふ事なき三ケ日

不図^{ふと}揺れる蚊帳^{かや}の釣手や今朝の秋

別るゝや夢一筋の天の川

「筒袖や」の句。明治三十五年作。

漱石は明治三十三年、イギリス留学を命ぜられてロンドンに赴いた。以下五句はロンドンで子規の計報に接した時の作。句々、知己を失った悲しみにつらぬかれている。この前からすでに作句の数は減っていたが、もはやいかに作ろうともこれを示すべき子規はいなかった。漱石の帰国は翌三十六年一月である。

「春の水」の句。明治四十年作。

「問ふて曰く男女相惚の時什麼^に漱石子筆を机頭にころがして曰く天竺に向つて去れ」という禪の公案になぞらえた前書があり、「讀曰」としてこの句がある。

「花落ちて」の句。明治四十年作。

同じく「問ふて曰く相思の女、男を捨てたる時什麼^に 漱石子筆を机頭に堅立して良久曰く日々是好日」の前書があり、「讀曰」としてこの句がある。